

「宮城県を元気にする高知応援隊」に参加して

(株)第一コンサルタント 調査一課 酒井 寿彦

1. はじめに

私は当社に入社して24年間公共事業に携わってきた。3月11日に発生した東日本大震災は、おそらく私の人生の中で最大の地震(津波)になると思う。私はこの地震を教訓に、建設コンサルタントの技術者として、高知県近海で近く発生されると言われている東南海・南海地震の対策に少しでも力になることが使命と考えている。東日本大震災の被災状況は、連日新聞やテレビでいやと言うほど報道されているが、実際に自分の目で見て肌で感じ、被災者の方に少しでも力になればと思い「宮城県を元気にする高知応援隊」計57名(当社から14名)の一員として参加した。

私の役割・日程(6月16~20日)は、寄贈車の輸送(16,17日)、現地視察(17日)、炊き出し(18日)、民間ボランティア(19日)、自由行動・帰高(20日)であった。

2. 寄贈車の輸送(16-17日)

車2台を気仙沼のNPO法人に寄贈するため、当社の6名で輸送。本隊より1日早く6月16日11時に当社で出陣式を行い、宮城に向けて約1,200kmの道のりを出発した。



私は岡内君と柿本君の3人でキューブへ乗り込み出発した。キューブの元オーナーはタバコを吸わない方であったため、ヘビースモーカー

である私と岡内君も車内禁煙で送り届けることとした。吸わないと決めてしまえば意外に苦痛はなかった。

輸送ルートは、瀬戸大橋から山陽・中国・名神・北陸・磐越・東北道を通り仙台南ICを目指した。琵琶湖までは雨の中、北陸道からは闇の中、何も景色を楽しむことができず2時間くらいで交代しながら進んだ。新潟の磐越道に入った頃からどっと疲れがはじまり、みんなのテンションが下がった。こまめに休憩を取りながら磐梯山SAに着いた頃には空が明るくなってきた。まだ朝の3時50分。高知より1時間くらい早い夜明け。東北道に入り仙台南IC直前の菅生PAに着いた時(朝5時)疲れがピークに達し約1時間の仮眠をとった。朝7時頃無事に高速を降り、疲れを取るためみんなで温泉に入った。疲れと眠気で頭がボーとしていたが、ジェットバスが気持ちよく一瞬であったが心身ともに癒すことができた。

事故も無く無事に仙台駅に到着し、午後1時に本隊と合流した。

3. 被災地の視察(17日)

陸送班は本隊と一緒にバスへ乗り込み、被災地の視察へ出発した。

仙台市内は阪神淡路大震災のようにビルや建物、高架橋などが倒壊しているわけではなく、一見どこが被災地と思わずほど普通の光景であった。よく見ると瓦屋根が少しズレていたり、塀の一部破損してたり、液状化により家やマンションの基礎部分が剥き出しになっている



ところが少しある程度で、古い建物でも原形を留めており、あの巨大地震があったとは思えないほど平然としている。



仙台駅周辺の光景

海側へ移動し津波到達エリアへ入るとその光景は一変してくる。内陸部の比較的津波の勢いの弱い区域は、建物の骨格は残っているが塀や窓ガラスを突き破り、瓦礫や家財道具が家の内部に散乱している。



海に近づくにつれ悲惨さを増してくる。仙台港付近になると一帯が瓦礫の山となっている。



外海に直接面している七ヶ浜へ向かった。着いたとたん津波のパワーに圧倒された。建物は基礎部分のみを残し根こそぎない。



防潮堤は決壊し、擁壁や水門などは倒壊している。引き波による擁壁や防波堤・防潮堤などの内側の洗掘・倒壊も目につく。現在の構造物は引き波に弱いことが見て取れる。



砂浜にはコンテナや瓦礫が散乱した状態で残っており、重油と磯の臭いが混ざった不快な臭いが漂っている。



そんな中、被災地の瓦礫の中を数人の小学生が元気そうに帰宅していた。被災のショックも心に刻まれていると思うと非常に複雑な気持ちになった。



七ヶ浜を後にし、バスの中から海岸沿いを視察しながら宿泊施設へ向かった。船や車がとんでもない高さのところに引っ掛かっている。海岸沿いはどこも壊滅状態であった。

全体的に見て道路の瓦礫はほとんど撤去され復旧が急ピッチで進んでいる。海岸沿いの道路もほとんど通行可能な状況になりつつある。



瓦礫は全く手つかずのところもあるが、分別がかなり進んでいる。しかし撤去にはまだまだ時間が掛かる。



視察の途中から昨夜の睡眠不足と疲れに負け熟睡。松島町の宿泊先（野外活動センター）に着き、その晩は安部県議講演会婦人部主催の夕食会でもてなされた。手打ちソバがとても美味しかった。夕食会の後、明日の炊き出しの打ち合わせを行い就寝。16人部屋の2段ベットで学生の合宿気分を味わった。夜中に目が覚めるとイビキの大合唱であった。



4. 炊き出し（18日）

朝7時に南三陸町と気仙沼に向けて出発。2班に分かれて「炊き出し」「体育教室」「ネイルケア」「よさこい鳴子踊り体験」を行う予定。バスに乗り込み南三陸町の志津川高校へ向かった。南三陸町に着き、何度も報道では見た光景であるが町が根こそぎない。しかも何キロも奥まで強い勢いのまま津波が押し寄せ、跡形がない。改めて津波のパワーを実感した。



バスから南三陸チームを降ろし、海岸沿いを気仙沼に向かう。道中同じような光景が続き、復旧できていない道路もある。道路状況が悪く渋滞し、1時間遅れの11時に気仙沼高校に到着した。急いで荷物を下ろし設営・調理準備に取りかかった。12時頃から提供を待つ人が並びはじめ、バタバタしながら何とか12時半より提供を開始した。



みんな「おいしい」と喜んでいただいた。おかわりする学生もいた。苦労が報われる瞬間であった。みんなのチームワーク良く炊き出しを成功し、支援物資や余った食材等は支援物資センターへ運んだ。

1時間ほど予定時間をオーバーしていたため慌てて片付けを行い、最後に被災者の方と「よさこい鳴子踊り体験」を行うため、避難生活をしている体育館へ移動した。段ボール箱で仕切られた狭いエリアで、何ヶ月も被災生活をしいられている状況を目の当たりにした。プライベートもなく、することもない、自分はこれに耐えられるだろうか？想像を絶するものがあった。南海大地震が起これば明日は我が身と目に焼き付けた。

私自身よさこいを踊るのは初めてで、磯木チーム長から「見よう見まねで踊ればいい」といわれていたがとても不安であった。被災者の方にも鳴子を配り一緒に踊った。被災者の方から笑顔がこぼれた。



踊れる踊れないは関係なかった。一緒にリズムに乗って体を動かすこと、それだけでも被災者の方にとっては普段にない変化であり、体を動かし人と接する機会である。「よさこい鳴子踊り体験」がここまで喜ばれるとは思っても見なかった。また、たくさんのお礼のメッセージもいただいた。



時間が遅れていたため被災者の方と話す間もなくバスへ乗り込んだ。鳴子を持った子供たちに送られて被災地を後にした。



南三陸チームを迎え松島町の宿泊施設へ向かった。高速道路で大渋滞に遭い午後7時過ぎに到着。その晩は安部県議松島町青年有志主催のバーベキュー交流会が開催され、松島町長もお見えになり、各テーブルに地元の方を挟んで大いに盛り上がった。



5. 民間ボランティア（19日）

朝8時前「宮城県を元気にする高知応援隊」の解散式を行い、お世話になった方々にお礼をいい、当社の調査班を除く10名は多賀城市の災害ボランティアセンターに出発した。



災害ボランティアセンターに向かうタクシーの運転手さんから色々な話を伺った。松島町は小さな島々に守られ被害は小さかった。既にほとんど復興している。津波の第一波が大したことなかったのだから家に帰り二波三波で被災した人が多くいる。何キロも入った内陸部では、まさかそんな津波がくるとは思いもせず、気づいた時には遅かった。など、大津波に対する認識の甘さがあったことが分かる。

災害ボランティアセンターに着き受付をする。県外の方が遙かに多い。室内に入り順番に椅子に座る。座った順番に作業が割り当てられ、グループ毎に個々の作業の説明を受ける。私を含め6名で住宅兼焼き肉店の床下に溜まった泥のかきだし作業となった。作業内容や必要な道具、注意事項等の説明を受け、作業道具を送

迎車に積み込む。



準備をしていると道具係の方に「大変なところに行くやね」と言われた。作業道具がフル装備らしい。少し不安になった。現地に着いて家主さんに説明を受け作業に取りかかる。



中に入るとものすごく蒸し暑い。奥の部屋はまだ泥が湿っている。作業の邪魔になる大きな家財道具を別の部屋に運び出し、大きなゴミを取り除き、スコップで狭い中に手を突っ込んで泥をかき集め土のう袋に詰める。体勢が悪く腰への負担が大きい。暑さと湿度でゴーグルは曇りマスクの中は汗だらけで息苦しい。30分すると脱水状態になるくらい全身汗だくになる。こまめに水分補給をしながら作業を続けた。最初は思うように作業が進まなかったが徐々に慣れてきた。3時までの予定が12時前に終了、家主さんの確認を得て終了した。家主さんからは丁重にお礼の言葉をいただいた。少しは「力になれた」と実感できる瞬間であった。

災害ボランティアセンターに帰ると、別の場所に行っていた仲間が既に作業を終えて帰っていた。1日のボランティア活動の予定でいたため、これで終わりかと思うと物足りなさを感じ

ていた。どうしようかといっている時に、別の作業場所で人が足りないと応援要請があった。係員の方が「行っていただけないか」と私たちに声を掛けてきた。10名全員で向かうことにした。作業は民家の瓦礫撤去であった。現地に着くと、塀は崩れ住宅の1階部分は戸や壁が粉々になり家財道具や瓦礫が散乱している。周り一帯がこのような状況である。朝から作業を行っている10数名（外国の方もいた）と作業分担を行い取り掛かった。この家は昨日から作業を行っているとのこと。瓦礫は分別を行い、重要と思われる物は家主さんに確認の上撤去した。埃がすごくゴーグルとマスクは必需品である。チームワーク良く2時半頃終了した。

災害ボランティアセンターに帰り、一緒に作業した方々と記念に一枚。ボランティアに参加して、まだ手つかずの家も沢山あった。まだまだボランティアの助けが必要である。



6. 自由行動（20日）

帰りの新幹線まで時間があるため、2日間お世話になった松島町へ観光に行った。松島海岸駅に着き遊覧船の切符を買った。



町は小さな島々のお陰で比較的被害は小さい。店も3分の1程度は営業を再開している。

国宝の「瑞巖寺」や周りの重要文化財などは修復中である。遊覧船に乗り込み島巡りに出発した。平日にもかかわらず結構な観光客がいる。小さな島々が点在し美しい景色が続く。被災地であることを一瞬忘れる。



中には瓦礫やコンテナ、船等が被災したまま残っている島や、一部が崩落している島があり現実に戻される。牡蠣の養殖も少しずつ始まっており、松島町は復興が本格化している。



12時に松島を後にし帰路についた。無事に午後8時過ぎ高知龍馬空港に到着。車中泊含め4泊5日の日程を終えた。

7. 最後に

被災地を見て学んだことは、東日本大震災は、地震の規模から見ると地震動による被害は比較的小さい。私が見た範囲では、津波以外で倒壊している建物等はあまり見受けられなかった。反面、津波による被害は甚大で、いくら強固な防波堤や防潮堤を建設しても、巨大津波のエネルギーを吸収することは不可能に近いと感じた。今後のハード対策としては、津波を防ぐ新技術の開発も必要であると思うが、津波を完全に防ぐのではなく、威力を低減し人が逃げる時間を稼ぐための防波堤の設置や、津波の流れをコントロールし減災につなげる配置、高台

まで逃げることのできない地域には、今回の津波の威力にも耐えられる構造の津波避難タワーが必要と思った。

ハード対策と同時に特に重要であるのがソフト対策である。「津波は来ないだろう」、「来たとしてもここまでは来ないだろう」という認識不足。「一波が大したことなかったため帰宅し、二波三波に飲み込まれる」という認識の甘さ。これまで経験したことのない津波であるため仕方ない面もあるが、きちんとした知識を持っていればかなりの人が助かったと思う。現に報道等で、小学生が日頃の避難訓練を生かし全員が助かっている地域もある。いかにソフト対策が重要であるか分かる。今後、正しい知識を植えつけることが重要で、地域ごとのハザードマップの作成・見直しや、県・市町村が行う大規模な訓練だけでなく、学校や企業、地域、部落等で自分たちの避難場所を確実に認識し、定期的に避難訓練を行うことが重要と思う。また、この大震災の教訓を風化させないことも重要である。

今回は非常に貴重な経験をさせていただいた。松島町でお世話になった皆様、「宮城県を元気にする高知応援隊」の役員の皆様、心より感謝申し上げます。この経験を微力ながら少しでも東南海・南海地震対策に活かしていきたいと思っています。最後に、東北の1日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

2011年6月28日

レポート内容に認識不足のところがあるかもしれません。その点はご了承下さい。